NIE実践報告

1．タイトル：道徳教育における新聞の活用

2．学校名

山形県　米沢市立第一中学校

3．実践者名（代表者名）

松田　真由子

4．学年

3年

5．教科・領域名および受講児童・生徒数

道徳　生徒４０名

6．単元（本時の学習課題）名

ケータイが縛る生活

7．目標(狙い)

新聞のコラムをきっかけに、自分の携帯電話の使い方を振り返り、携帯電話との安全な関わりについて考える。新聞を生きた教材として活用することで、生徒の興味を喚起して深い話し合いを促進することを狙う。

8．評価の視点

授業の導入とまとめの部分で、生徒の発言をさせたり、プリントに記入させたりすることで、生徒の考えがどのように深まったかを評価する。

9．年間指導計画における本単元の位置づけと時数
（または、単元展開および時数と本時の位置づけ）

本単元は一時間扱いとして、本時の中で完結する形をとった。

10．単元（本時）の学習展開（含む時数）と留意点

利用した新聞：朝日新聞コラム「ケータイが縛る生活」２０１０年9月7日朝刊
授業展開：記事をそのまま使うのではなく、部分ごとに記事を抜粋し、授業の流れに合わせて配布しながら展開していった。
導入：ケータイが縛る生活の表題を拡大印刷し、「縛る」の部分を隠して掲示。最初に「動詞」が入る、というヒントだけ与え、生徒にどんな言葉が入るかを考えさせた。生徒は最初「踊る」「笑う」「話す」というようなプラスイメージの言葉しか出てこなかった。
展開：「縛る」という言葉が入るということを伝え、記事の中にある生徒の「相手のメールにすぐ返信しないと不安」「メールの方が素直な自分が出せる」という言葉に着目させ、自分と比べてどうか、この言葉をどう感じるかなどを指名したり、自由に発言させたりしながら生徒に考えさせた。
まとめ：コラムの中の発言に共感するという意見、自分はそんなことを思わない、など多様な意見が出たが、最後に授業を通してどんなことを考えたのか、ということを書かせた。

11．児童・生徒の反応、感想・意見

当初、携帯電話の危険性を考えさせ、使い方を気をつけさせるような授業展開を考えていたが、生徒にとって携帯電話はマイナスなものではないことが発言からわかった。そのため、携帯電話を有効に活用するためにも、人と人との生のかかわりが良好なことが土台となる、ということを多くの生徒が感じたようだった。

12．成果と課題

新聞を生きた教材として用いたことで、通り一遍のきれいごとを学ぶだけの道徳にならなかった。同じ年代の中学生の言葉を出発点として、自分の身の回りのことへ授業を展開できたことから、生徒が生き生きとした話し合いを展開することができたと思う。

ただ、生徒の話し合いが盛り上がるほど、教員側のまとめが道徳の授業として生徒の考えをうまく収束することが困難になってしまった。そのため、教師が意図した授業展開にすることができなかった。生きて勢いのある教材であるからこそ、教員の教材研究をもっと深めることが今後の課題であった。